

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 30 日現在

機関番号：84413

研究種目：若手研究（B）

研究期間：平成 21 年度 ～ 平成 23 年度

課題番号：21720042

研究課題名（和文）日本近代における朝鮮陶磁評価とその展開
— 日本近代陶芸への影響を中心に

研究課題名（英文）The Development of Artistic Evaluations of Korean Ceramics in Modern Japan — Featuring the Influence on Modern Japanese Ceramic Art

研究代表者

樋口 とも子 (HIGUCHI TOMOKO)

財団法人大阪市博物館協会 大阪市立東洋陶磁美術館 研究員

研究者番号：10531262

研究成果の概要（和文）：

日本における朝鮮陶磁評価の特徴と展開について、主に1910年代～1940年代の朝鮮植民地支配期を中心に考察を行った。これまで柳宗悦ら「民藝」の枠組からのみ語られがちであった日本の朝鮮陶磁評価について、(1)浅川伯教・巧、山田萬吉郎らが在朝鮮の民間人による朝鮮陶磁研究と日本の文化人との交流、(2)朝鮮総督府など官立機関による朝鮮陶磁製作、(3)当時の日本の陶芸家による中国・朝鮮陶磁評価の特徴比較、さらに(4)植民地期の朝鮮人文化芸術界における朝鮮陶磁評価、(5)植民地解放後の韓国における朝鮮陶磁研究との比較を行った。これにより当時の日本における朝鮮陶磁評価が、植民地期特有の官と民、日本と朝鮮の多様な受容層による関係性により単なる日本の文化人と陶芸界の海外芸術受容に留まらず、独自の展開を遂げたことが結論づけられた。

研究成果の概要（英文）：

This paper investigates the characteristics and development of artistic evaluations of Korean ceramics in Japan, featuring the period under the colonial rule, between the 1910s and 1940s. While in previous times the artistic values of Korean ceramics in Japan tended to be discussed within the framework of *mingei* (folk art) proposed by the activists including Yanagi Muneyoshi, this paper covers some different aspects: ① studies on Korean ceramics led by Japanese living in Korea, such as Asakawa Noritaka, his brother Takumi and Yamada Bankichiro and their friendship with the Japanese men of culture; ② production of Korean ceramics by state institutions including the Government-General of Korea; ③ comparison of the artistic evaluations made by the then Japanese potters on Chinese ceramics with those on Korean ceramics, and comparing ④ how the Korean ceramics had been valued among the cultural and artistic circles of Korea in the colonial period and ⑤ how Korean ceramics had been viewed among scholars in Korea through their studies after the liberation from colonial rule. Research on these aspects revealed how the peculiar political system of the colonial period provided influence on people of diverse social groups and status, both Korean and Japanese, in the field of appreciating or studying the ceramics produced in the country. Evaluations of Korean ceramics in Japan therefore was not limited to mere reception and appreciation of overseas art by the Japanese intellectuals and potters but created its own, unique page in art history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
平成 22 年度	500,000	150,000	650,000
平成 23 年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：近代工芸、韓国陶磁、植民地期、朝鮮陶磁研究、韓国陶磁史研究、浅川伯教・巧、柳宗悦、民藝

1. 研究開始当初の背景

日本の近代期に起きた朝鮮陶磁評価は、日本による朝鮮半島の植民地支配とほぼ時を同じくして始まった。朝鮮陶磁の収集と研究はこの時期に急速に進められ、在朝日本人および日本の文化知識人を中心にいわば“朝鮮陶磁ブーム”とも言える現象を引き起こした。これが日本近代の陶芸家の作品制作に大きな影響を与えたことは、既によく知られている。

しかし、これまでの日韓両国の近代陶磁史研究および日本における朝鮮陶磁評価研究には、その傾向に特徴が見られた。韓国では日本の植民地支配という時代背景のため、戦後長い間多くを語られることがなかったが、90年代以後植民地期美術史研究が急速に進んだことにより、韓国近代陶磁史についても近年工芸史研究の中で成果が蓄えられている。当初の先行研究では、宋キプムの「韓国近代陶磁研究」(『美術史研究』vol.15, 美術史研究会, 2001年)に代表されるように、朝鮮半島における近代の陶磁器制作と日本の植民地支配政策との関連性が中心として述べられ、日本の近代化政策のもとに大きく変化した陶磁器の工業生産体制や、「朝鮮美術展覧会」における日本人陶芸作家の出品作の傾向などに焦点が当てられている。また日本近代陶磁研究については、韓国陶磁史の勃興期を担った浅川伯教・巧の功績と柳宗悦ら「民藝」の活動がからめられ、多少の言及がある程度であった。一方日本における近代陶磁研究については、作家研究を中心として多くの研究成果が積み重ねられている。しかし戦前における朝鮮陶磁評価については、竹中均の「《韓国》陶磁の20世紀と柳宗悦—植民地期から解放後—」(『近代工芸運動とデザイン史』, デザイン史フォーラム, 思文閣出版, 2008年)において、柳宗悦の活動を韓国陶磁史のなかで再考察する試みが画期的であるものの、未だ学術研究としては述べられるところが少なかった。

また、当時多くの日本の陶芸家が朝鮮に旅行し、朝鮮陶磁の収集や窯址見学などを行っていたが、彼らによる朝鮮陶磁研究と作品制作との関係においても、中国陶磁評価と混在した「古陶磁」に対する研究の成果としてまとめられることが多く、日本人作家が何に興味を持ち、制作に受け入れたかについてはこれまで作品研究の中で考察されることはなかったと言える。

2. 研究の目的

本調査研究では、次の2点の目的により日本近代の朝鮮陶磁評価を再考察し、日本近代陶芸におけるその影響を考察し新たな位置づけを行った。

(1)これまでの日本近代における朝鮮美術評価は、陶磁器においても柳宗悦を中心とした「民藝」運動の側面からのみ語られることが多かった。しかし当時の日本国内への朝鮮陶磁の紹介は、浅川伯教・巧、中尾万三、山田萬吉郎などの在朝日本人を含む国内外の研究者および収集家たちの多様な層の人的交流および研究、収集活動において展開されたものであり、これは現在の日本における韓国陶磁鑑賞の価値形成や、韓国における陶磁史研究に関しても未だ多くの影響を及ぼすものである。だが彼らの活動がこれまで学術的な分野で明らかにされることは少なく、その形成期の状況が研究主題として語られることはなかった。そこで本研究では、未だ明らかな部分の少ない在朝の朝鮮陶磁研究者と日本の文化知識人との交流の足跡を辿り、その意義を考察した。

(2)上記のように、1910年代から1945年にかけて、いわば“朝鮮美術ブーム”とも言えるべき契機を経て、その成果は国内に住む日本人にも伝えられ積極的な朝鮮陶磁受容が行われたが、これは当時の日本の近代陶芸家たちの制作にも影響を与えた。本研究では、朝鮮陶磁研究の成果を積極的に制作に取り入れた富本憲吉や濱田庄司、河井寛次郎ら「民藝」運動の陶芸家ばかりでなく、「古陶磁」理解の中で中国陶磁とともに朝鮮陶磁に関心を持ち制作に取り入れた板谷波山、石黒宗麿、富本憲吉、川喜田半泥子などの日本近代の代表的な陶芸家の作品に関して、朝鮮陶磁の影響を考察し、日本近代陶芸史における朝鮮陶磁受容の新たな位置づけを試みた。

3. 研究の方法

本研究は、(1)日本および植民地期朝鮮における文献雑誌資料の収集(2)日本人陶芸家による近代期の作品調査(3)日本および植民地期朝鮮において鑑賞された朝鮮陶磁の作品調査の3点を軸とし調査研究を遂行した。

(1)では、日本および朝鮮における朝鮮陶磁収集家および研究者の活動について、資料収集を行った。韓国においては、特にこれまで未整理であった植民地期朝鮮の出版資料を調査

し、在朝日本人に関する資料を収集した。日本においては、当時大収集家として名を成しながらも後世に伝わることのなかった日本人収集家に関する情報を戦前の美術関連の出版資料から収集した。これらの資料を踏まえ、(2)、(3)に挙げた、日本人の朝鮮美術評価に関する重要作品を調査し、文献と作品の両方から実証的研究を試みた。また調査の段階に沿って日韓の研究会、学会などで双方の研究者の意見を聞くことでインタビューを行うなど考察の対象や方法を広げていった。最後に、調査対象を広げ植民地期の日韓の朝鮮陶磁研究との比較のため 1945年～1970年代の韓国における朝鮮陶磁史研究文献、雑誌・新聞における関連記事収集、朝鮮陶磁史研究者による執筆記事、展覧会調査、当時の日韓における研究成果の調査、植民地期から活動を行っていた韓国人文筆家・画家による韓国陶磁関連作品の調査を行った。

4. 研究成果

日本における朝鮮美術評価について柳宗悦を中心とする「民藝」以外の三つの側面からの考察を目的とした。これに対し、(1)植民地朝鮮における浅川伯教・巧、山田萬吉郎など朝鮮の日本人を含む研究者および収集家たちの人的交流および研究・収集活動については、各人に関連した著作・雑誌記事・新聞等の文献を調査した。その他朝鮮に渡り彼らと交流をしながら青磁の調査も行った人物として、京都市陶磁器試験場を経て満州等にわたり中国陶磁の再現と産業化に貢献しようとした小森忍についても作品調査を行い、朝鮮と中国の現地における陶磁研究者の関わりの違いを考察した。また韓国近代美術史研究者との日韓研究集会において在朝日本人と交流のあった朝鮮人知識人について文献調査を行った。また(2)日本による高麗時代の青磁・朝鮮時代の陶磁の再現研究については、資料調査を行い官と民の両面から日本側の朝鮮陶磁評価を考察した。朝鮮総督府および民間企業による朝鮮陶磁の再現と商品化活動や、それに寄与した日本人陶芸家の活動について資料を収集した。

(1)、(2)については第 17 回アジア近代美術研究会「シンポジウム：コレクションと美術」、平成 21 年 6 月 21 日（於：財団法人石橋美術館）「浅川伯教の朝鮮陶磁研究と日本近代の朝鮮陶磁受容—鈴木正男氏寄贈・浅川伯教が愛した韓国のやきもの」展によせて、第 26 回アジア近代美術研究会（於：福岡市美術館）と、共同研究会「《東洋美学・東洋的思惟》を問う：自己認識の危機と将来への課題」（於：国際日本文化研究センター）で研究発表を行った。

その他、(3)古陶磁研究を行った板谷破山、

石黒宗麿、富本憲吉など日本近代の代表的な陶芸家についても作品調査を行い、第 23 回アジア近代美術研究会「民の美術」、平成 22 年 10 月 6 日（於：福岡アジア美術館）「近代陶芸家の朝鮮陶磁受容—河井寛次郎、濱田庄司を中心に」で発表を行った。また平成 21 年のテーマ展《鈴木正男氏寄贈・浅川伯教が愛した韓国のやきもの》展（大阪市立東洋陶磁美術館）のほか、京都の陶芸家宇野仁松の息子にあたる宇野宗麿が写しの製作に取り組んだ中国陶磁研究について、明治期から昭和初期の資料調査を行い平成 22 年に特集展「宇野宗麿の陶芸」（大阪市立東洋陶磁美術館）を行ったことも当時の巷の窯業家にとっての古陶磁受容を考察することができた。他にも植民地期から 1950 年代の在朝鮮日本人画家である加藤松林人ら日本人美術家と朝鮮人の在野作家金煥基らの朝鮮陶磁に関連した作品および文献調査を行った。この(3)については、日本と朝鮮における陶磁器分野に限らず、絵画・彫刻といったいわゆる「骨董収集」の側面とは異なる美術界の朝鮮陶磁評価について考察を広げた。これにより植民地期・第二次大戦後の解放期において朝鮮の文化知識人たちが日本的価値観から離れた独自の「朝鮮美術史」を整理する中で、高麗・朝鮮時代の陶磁器をひとつの柱としたことが結論付けられた。これに関連し当初の研究目的から更に時代を広げ、植民地時代以後の韓国における韓国陶磁史研究と陶磁評価の比較・考察へとつなげることになった。これについては、解放以後から 1970 年代までの韓国における朝鮮陶磁研究と評価の変遷を考察し、第 39 回東洋陶磁学会大会「東洋陶磁研究の 100 年を振り返る—東洋陶磁史はどのように語られてきたか」（於：根津美術館）で口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ・樋口とも子「大阪市立東洋陶磁美術館特集展《宇野宗麿の陶芸》展に寄せて」、「陶説」第 683 号、36-38、査読無、平成 22 年 2 月
- ・樋口とも子、鄭銀珍「大阪市立東洋陶磁美術館《鈴木正男氏寄贈—浅川伯教が愛した韓国のやきもの》展に寄せて」、「陶説」第 676 号、20-31、7-10、査読無、平成 21 年 7 月
- ・樋口とも子「大阪市立東洋陶磁美術館《鈴木正男氏寄贈—浅川伯教が愛した韓国のやきもの》展に寄せて」、「陶説」第 675 号、29-31、査読無、平成 21 年 6 月

〔学会発表〕（計 5 件）

- ・樋口とも子「韓国における陶磁史研究と作品評価の変遷—解放から 1970 年代までを中心に」第 39 回東洋陶磁学会大会、平成 23 年

11月27日、根津美術館

・樋口とも子「日本近代における朝鮮陶磁受容—〈朝鮮陶磁史〉の成立を中心に」共同研究会「《東洋美学・東洋的思惟》を問う：自己認識の危機と将来への課題」平成23年7月24日、国際日本文化研究センター

・樋口とも子「日本近代における韓国陶磁研究—『高麗』『李朝』陶磁受容の比較を中心に」第26回アジア近代美術研究会、平成23年6月25日、福岡市美術館

・樋口とも子「近代陶芸家の朝鮮陶磁受容—河井寛次郎、濱田庄司を中心に」第23回アジア近代美術研究会「民の美術」、平成22年10月6日、福岡アジア美術館

・樋口とも子「浅川伯教の朝鮮陶磁研究と日本近代の朝鮮陶磁受容—鈴木正男氏寄贈・浅川伯教が愛した韓国のやきもの」展によせて」第17回アジア近代美術研究会「シンポジウム：コレクションと美術」、平成21年6月21日、財団法人石橋美術館

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 とも子 (HIGUCHI TOMOKO)

研究者番号：10531262

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：